

大陸(中支)

在支防空隊敢闘記

香川県 西山 定雄

私は、大正十二(一九二三)年十二月一日、香川県で生まれました。昭和十八(一九四三)年、徴兵検査を受け、甲種合格でした。昭和十九年三月一日、広島西部第六部隊へ現役入営しました。その当時の我が家の家庭の状況は

父 健在 農業 (田三反五畝、畑八畝)
母 " " "
本人 " 長男 呉海軍工廠勤務(徴用)
妹 " 学生

妹 " "
ということ、私が兵役に入っても格別に困ることもない普通の家庭条件でした。

町内では同じ日に二人の入営がありました。昭和十九年ともなると防諜対策のこともあり、盛大な歓送風景はなく平凡なもので、身内の者のささやかな人数の程度のものでした。香川の故郷より広島市へと独りで旅立ちました。

最初は船舶防空兵と言っていましたが、その後は編成の仕直しばかりで、兵種名も任務内容もコロコロ変わる始末でした。

昭和十九年三月十二日出発、博多、釜山、牡丹江へ。さらに四月十一日、牡丹江出発、ハルビンへ。続いて列車で満州を南下する。車中で同郷の同年兵の井

原、矢吹、阿部の諸君と一緒に話がはずむ。

列車は山海関を通過。これより戦地勤務となりま
す。車窓より万里の長城を望む。感無量で、河南省開
封駅で下車しました。これで出発以来一週間の貨物列
車の旅は終わりました。

開封の街は平穩で、街角には野菜や饅頭などを売る
露店が並んでいました。黄河の流域で、黄砂が強い風
に舞い、視界は一〇メートル先も見えない。支給され
た防塵眼鏡が役立つのがこれで分かりました。この塵
の中で中国人は平気で食物を口に運んでいるのには驚
きました。我々を出迎えてくれた曹長殿の長い髭も黄
砂にまみれ、ものものしい姿でした。

部隊本部まで車輛で到着。部隊長の訓示。

「諸氏達の先輩はつい先刻まで南岸の霸王城で戦っ
ていた。諸氏も先輩に負けぬよう立派に戦ってほし
い」と。霸王城には中国軍で有名な湯恩伯將軍の率い
る精銳軍が対峙していたのであった。私達の配属され
た戦車第一師団防空隊は、部隊長が船曳大佐であり、
高射砲二個中隊、砲八門、機関砲四個中隊、砲二四門

の車輛編成部隊でした。その任務は戦車師団の防空援
護でありましたが、作戦の末期には湘桂作戦に参加
し、軍の防空部隊として諸部隊の渡河地点、橋梁の通
過援護に日夜の別なく行動を続けました。撃墜七十七
機の偉勲は上聞にも達した榮譽部隊でした。

我々はひとまず黄河南岸に陣地を構築し、黄河大橋
梁の防空の任につきました。北支の河南作戦が始ま
り、黄河南岸で黄河鉄橋防衛中隊を残して、さらに部
隊の中から我が第六中隊は軌道歩兵連隊と同行援護を
命ぜられ、部隊主力と別れて作戦に参加することにな
りました。ここで同郷の矢吹君と別れました。

昭和十九年五月一日、昌平北方へ夜行軍中、敵の強
い反撃に遭遇し、部隊は一時進攻を停止しました。十
九時三十分頃より身辺に敵弾が集中してくる。ここま
で来る間に、白砂鎮で前田君戦死、中島君が竜門で戦
死、運転中の渋谷君は下肢大腿骨切断の重傷、山脇伍
長殿も大出血で戦死、ラッパ手の竹内さんは膝蓋骨上
部貫通銃創と死傷者が相次ぎました。

中隊は石仏窟で有名な竜門へと向かいましたが、私達五人は戦死者の火葬を命ぜられて残留し、茶毘に付し、その遺骨を胸に渡河し、本隊に合流するため竜門を目指しました。

竜門から洛陽へ向かう道路は、洛陽へ洛陽へと進撃する各部隊で混乱を極め、我々はこの渦の中から脱しようと考え、道路を外れて友軍歩兵の散兵線をさらに前進しようとして前に出た時、歩兵陣から「五〇メートル前方に敵の陣地がある。危ない！ 下がれ！」と怒鳴られ、驚いて後退しようとした時、敵陣から一斉射撃をうけましたが、歩兵の援護射撃のおかげで一命を拾ったという胆を冷やした一場面がありました。

河南作戦は洛陽陥落で終了。敵將湯恩伯軍は西安に退却、本隊はこれを追撃して靈宝作戦へと移りました。この作戦間、歩兵に協力の命を受けた第六中隊は、靈宝に向かい追撃戦に移り、敵陣地攻撃の際、歩兵は散開攻撃位置につき、我々はその後方に布陣し、攻撃開始と共に、不意に現われた敵のトーチカから熾

烈な射撃を受けました。このため歩兵の突入は一時頓座するかに見えた瞬間、我が機関砲は正確な集中射撃をトーチカに浴びせ敵を遁送させ、我が歩兵の突入が成功するという劇的な場面を展開しました。

作戦開始以来、お互いに消息を絶っていた本隊がたまたまこの攻撃部隊の直後に進出していたので、我が中隊のこの有効射撃を目撃していたのでした。お互いに感激の一時でした。私達は洛陽攻撃後、中隊主力と別れて黄河橋梁の対空援護のため黄河南岸へ引き返すこととなりました。

その理由の一つに四月二十八日、B24コンソリデーテッド二十一機による黄河大橋梁爆撃の件があったと聞きました。

私達は入営以来一度も初年兵教育を受けたことなく、いきなり戦線に投入されたので、戦陣そのものが初年兵教育でした。この橋梁警備二十日間で私達の初年兵教育でした。私達の第六中隊は八九式高射機関砲隊で二〇ミリ径の砲を装備し、陸軍の中で最新の対空射撃の優秀砲を装備していました。「射撃速度

がいちじるしく速く、移動軽快、中空以下の敵機に対して迅速輕易に射撃を行うに適す」とこの砲の特性の暗唱を練り返し叩き込まれました。二〇ミリ口径二〇発弾倉、曳光弾使用、軽快回転自在、車載にて移動敏速などの特長を備えていました。

昭和十九年七月二十四日、黄河南岸を出発、湘桂作戦に参加のため漢口の偕行社屋上に中隊は布陣、集結部隊の対空援護につきました。

同十九年八月末、湘桂作戦に参加。漢口、長沙、衡陽、靈陵、全県、桂林、ついに柳州へ到着し飛行場警備にあたりました。ここで昭和二十年正月を迎えました。ここに至る間は、全く筆舌に尽くせない苦難の連続でした。

まず、長沙の直前の黒石頭には九月二十五日到着、湘江支援左岸に布陣していた中隊が昼食後「爆音！」と監視哨の叫び声、「定位置につけ！」隊長号令があり敵機発見、B 25爆撃機二機、P 38一機、P 51五機。まず爆撃機が急降下爆撃態勢に移る。その直前を隣接

する第二中隊の高射砲が弾幕を浴びせる。間髪を入れずに我が第六中隊の機関砲がP 51の編隊を相手に一斉に火蓋を切る。六門の砲口から凄まじい勢いで火の帯が虹のように敵機目指して噴き上げられる。たちまち敵機の周りを包んでしまう。

P 51の編隊はパッと散り、二、三機は左に、三、四機は反転して西方の山陰へ遁走する。B 25より投下の爆弾は橋梁より五〇〇メートルも離れた地点に落下、ドドドンと轟音すさまじく爆発しました。渡河地点はびくともせず、無事でした。

敵の反転攻撃を予期して待機中、予想通りP 51機が中隊目指して突っ込んで来ました。「やるか」「やられるか」の一瞬、眼鏡手の頬を敵弾がえぐりとり、砲身や付近の砲手に赤い血潮を浴びせるが、眼鏡手はひるまず敵機を眼鏡で追いつける。敵機は遁走、後で彼は衛生隊へ収容されました。

長い行軍の間こんな対空戦闘を毎日のように繰り返しながらの行軍でした。足の早い機関砲中隊は先行し、陣地を敷き、戦車部隊の通過を援護しながら前進

しました。

高射砲中隊は、敵機の不意の急襲の都度、戦死者や重傷者を出すなど必死の追及行軍です。P 51に弾薬車を撃ち抜かれて火薬爆発の寸前、決死的消火で辛うじて爆発を免れたときもありました。

山中の桐の実があまりにも赤々と見事なので、それを食べて下痢をしたり、連日の悪路運転で疲労の極に達した運転手がつい居眠り、トラックを横転させたり、重なる困苦との戦いの連続でした。

昭和二十年正月頃から反転作戦に移行。私達は柳州北方二〇キロ地点の重要な橋梁の存在する脚板州の防空警備の任務でここに残留警備につきました。この橋梁の確保が反転する友軍の死命を制する重要な任務でした。反転作戦は攻撃作戦と異なり、心理的に寂しい気持ちになりやすいものでした。

ここらで閑話休題。私個人のことを述べます。

機関砲一門につき人員六人です。

第一砲手 一人

弾薬手 三人

観測手 一人

距離 一人

計 六人

私は第一砲手でした。任命された理由は不明です。私は何もかも判らぬまま広島島の部隊に入り、屯営生活もほとんど無い状態で満州へ、更に中国へと移りました。そして初年兵教育は即実戦での教育でした。

敵機が来ると他の部隊は急いで隠れる。それに反して私の部隊は第一線となり対空射撃をする。また敵機がない間は対空監視である。何かチグハグの感もしたものです。ただ公平であったことはマリアリアにかかり毎日十四時頃に四〇度の熱が出て苦しんだことです。マリアアだけは他の部隊と公平になりました。また砲の射撃目標は敵の飛行機です。時として敵の戦車を射ちます。もちろん鉄板を貫通して破壊する力はないのですが脅しです。嬉しかったのは敵機を目前で射ち落したことです。

さて、六月四日正午頃陣地内で昼食を終わって休憩時間の時、青木小隊長殿は砂糖黍をうまそうに嚙っていました。突然爆音が迫りP51四機が接近、その内の二機が真上から急降下しつつ銃撃を加えつつ接近、ダーダーと耳を劈く掃射を浴びせてきます。杉浦分隊長は一番砲手井上上等兵の肩に合図して「撃て！」と命令。友軍は反撃射を敵に浴びせます。敵弾の嵐は私の身辺をかすめ、私の五メートル後方の青木小隊長に集中しました。小隊長殿は左胸部左足先、大腿部その他全身に七弾を浴びて敵機を睨みながら即死散華でした。

この状況下で杉浦分隊長は「小隊の指揮は、杉浦がとる！」と大声で叫び、指揮交替、対空戦闘は数分で終わりました。橋梁は無事でした。小隊長殿の霊に仕えました。日頃やさしい人格の方で、兵の信頼を得、任務に忠実な幹候出身の隊長でした。

五日、六日と敵機の橋梁に対する反復攻撃が繰り返されました。まず敵の二機が偵察に先行し、次の二機が接近降下、爆弾投下と手順を定め襲撃を繰り返しま

す。我々防空隊の必死の反撃で、その都度、橋梁確保の任を果たすことができました。

昭和二十年八月十六日、黄沙舖において終戦を知りました。

昭和二十年八月十七日、黄沙舖出発、反転開始。

昭和二十年八月末、長沙において武装解除し漢口に集結。

昭和二十年十月十五日、漢口出発、江西省鄱陽湖畔の中国人部落で捕虜生活。

昭和二十一年五月末、帰国命令、湖口を出発し南京へ上陸、鉄路上海へ。

昭和二十一年五月三十一日、上海飯田栈橋より「大瑞丸」に乗船、出港。

昭和二十一年六月二十三日、鹿児島上陸。

昭和二十一年六月二十四日、解隊式、再起再会を約してそれぞれの故郷へと名残りつきない別れをした。

なお、昭和五十年神戸で、以後東京、名古屋、松山、鹿児島、仙台、新潟、熊本で戦友会を開き旧交を温めています。

復員後、昭和二十二年結婚。現在夫婦共に元気。子は男、女、女と三人、孫は六人、皆元気です。香川県出身の同部隊同年兵相寄り相睦み、老体の無事を喜ぶ幸せに感謝し、中国大陸に散った英霊の御冥福を、御家族の御多幸を祈ること切であります。

大陸に

散華の戦友を偲びて

兵庫県 横田芳郎

私は兵庫県神崎郡福崎町福田で生育しました。家族は両親の元に姉・兄・私・妹二人の五人兄弟でした。父は鉄道貨物取扱運送業を営み、順調な生計をしておりましたが、昭和五（一九三〇）年、病氣にて他界しました。その後、気丈な母親のお陰で兄弟仲良く無事に成長しました。

私は尋常小学校卒業後、旧制県立中学校に進学しました。学校の周辺は第十師団管下の各兵科の兵営並び

に広い練兵場等があり、完全な軍都でした。中学の教科の中に配属将校担当の軍事教練が取り入れられて、野外演習など、相当厳しく鍛えられました。四年生の時に、陸軍士官学校や海軍兵学校への軍人志望者の募集に応じて多くの級友が進みました。

私は体力に自信がなく軍人の途を諦めて、卒業後、専門学校に進みました。そこを卒業後は東京の会社に就職して、川崎市にて下宿していました。そして十二月八日が来ました。太平洋戦争勃発です（当時は大東亜戦争と呼称）。

緒戦の大戦果が発表されるや、全国民の熱狂的興奮でした。東條首相が日比谷公園に現れて大演説を行い、戦勝気分が酔う国民は絶頂にあり、私も一目見ようと人波に揉まれながら東條首相を目撃した時は感動しました。今もあの時の情景が、心の片隅にあります。もちろん、私もその年に（昭和十六年徴集）徴兵検査を受け、第一乙種の現役兵でした。昭和十七年二月一日から昭和二十一年六月二十日まで（四年五ヵ月）軍人として服務しました。